

防衛的悲観主義と承認欲求の関係について

1210520 弘田 莉子

高知工科大学 経済・マネジメント学群

1. 序論

防衛的悲観主義 (defensive pessimism : 防衛的悲観性、対処的悲観性ともいう) は認知的方略のひとつである。ここでの認知的方略は、過去のパフォーマンスに対する認知と将来のパフォーマンスに対する期待によって4つに分類されており、防衛的悲観主義のほかには、方略的楽観主義 (過去のパフォーマンスについてのポジティブな認知と、それに一致する将来への期待を有する)、非現実的楽観主義 (過去のパフォーマンスへのネガティブな認知を有するにも関わらず、将来への高い期待を持つ)、真の悲観主義 (過去のパフォーマンスのネガティブな認知と、将来に対する低い期待を有する) がある (Norem & Cantor, 1986)。この定義で表すと、防衛的悲観主義は過去のパフォーマンスについてポジティブに認知しているにも関わらず、将来への低い期待を有する認知的方略となる。防衛的悲観主義と真の悲観主義の違いは、過去のパフォーマンスをポジティブに認知するか、ネガティブに認知するかという点であり、将来への期待の持ち方の違いから、防衛的悲観主義と方略的楽観主義が対比されることも多い。また、小島 (2011) によると、Norem (2001) は悲観主義者の中に、失敗や最悪の状況を想像し、起こり得る可能性をすべて熟考することによって将来の出来事に対する努力や準備が動機づけられる認知的方略を有する者がいることを示しており、そのような認知的方略を防衛的悲観主義と表現している。

例えば、認知的方略とテスト対処方略、学業成績の関連についての研究 (外山, 2005) によると、防衛的悲観主義者は過去の学業成績のポジティブな結果を認知しているにも関わらず、将来の遂行結果に対する期待が低いという結果が見られた。つまり、現実 (過去の学業成績) を多少歪めて将来を悲観的に認知しており、“なるようになれと思う” “あまり考えないようにする” といった、これから迎えるテストに対してあまり考えたり悩んだりしないという回避的思考を用いることがいい成績につながることを示されている。回避的思考を用いず、最悪な事態を予想することで、これから遭遇す

る課題場面に對して不安になるが、不安を否定するのではなく逆に利用し、前向きなアクションに変え目標達成につながるのである (Norem & Chang, 2002)。

また、学習行動についての研究では、防衛的悲観主義者は、“以前の自分よりよくできること” と “他人と比べてできるようになること” の両方が、効果的な学習への取り組みを促進しているという (光浪, 2010)。さらに、有能さの評価基準 (Elliot & McGregor, 2001) として個人内 (絶対的) 評価よりも相対的評価を用いており、有能感を感じられる場合には「他者と比べてできること」を目標とするが、有能感を感じられない場合には「他者と比べてできないことを避けること」を目標としている (光浪, 2010)。このように、防衛的悲観主義は他者との比較と関連していることから、承認欲求と関連する可能性がある。

他者との比較と防衛的悲観主義の関係について、小島 (2011) の研究では、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の2つの承認欲求との関連が示されている。賞賛獲得欲求は、他者からの肯定的な評価の獲得を目指す欲求であり、拒否回避欲求は、他者からの否定的な評価の回避を目指す欲求である。拒否回避欲求の強い人は、他者からの否定的な評価を得てしまうことは最悪の状況であると捉え、それを回避しようと動機づけられやすいため、将来の出来事に対して最悪の状況を含めて起こり得る可能性をすべて熟考するという防衛的悲観主義者と非常に似た考え方を有する可能性が高いという。また、賞賛獲得欲求の強い人は、結果的に高いパフォーマンスを求めるという点で防衛的悲観主義者と類似のパフォーマンスを示す可能性が示唆されている。これらの特徴を踏まえて、承認欲求と防衛的悲観主義の関連を探索的に検討した結果、拒否回避欲求のみが強い人は過去の経験をネガティブに認知する傾向があったのに対し、拒否回避欲求と賞賛獲得欲求の両方が強い人は相対的に過去経験をポジティブに認知する傾向があり、賞賛獲得欲求の強さが過去の経験をポジティブに認知し

やすい傾向と関連する可能性が示されている。さらに、拒否回避欲求のみが強い人と、拒否回避欲求と賞賛獲得欲求の両欲求が強い人は、両欲求が弱い人に比べて将来の出来事に対して防衛的悲観主義の認知的方略を有している可能性も示唆されている。

小島（2011）では、日本語版対処的悲観性尺度（Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire：以下 J-DPQ とする。Hosogoshi & kodama, 2005）が使われている。J-DPQ は、防衛的悲観性を測定するために開発された尺度であり、過去の類似経験への認知を問う判別項目 1 項目（過去の同じような状況では、だいたい私はちゃんとうまくやってきた）、将来の経験への認知的方略を問う 8 項目（その状況ではどれくらい大きな失敗をする可能性があるかを、よく考えることがある 等）、フィラー項目 2 項目の計 11 項目からなる。しかし、過去の経験を 1 つの判別項目でのみ測定している J-DPQ は、承認欲求の類型別に防衛的悲観主義を比較するのに適した尺度とはいいがたく、防衛的悲観主義を測定する別の尺度と承認欲求との関連を検討することが、課題として挙げられている。

荒木（2005）の研究では、DPQ において過去の経験の成功体験に関する判別項目が 1 つのみであることは不十分であるとし、新たに過去の経験に対しての項目が 4 項目設けられた、防衛的悲観主義尺度（Japanese Defensive Pessimism Inventory：以下 JDPI とする。）を作成した。判別項目は、防衛的悲観主義と真の悲観主義を弁別するために設けられている。米国では自己高揚動機が強く、過去の成績に関して自己評価が高くなる可能性があり、判別項目の得点が高めに歪んで分布しているため、判別項目の使用が中止されているが（Norem & Illingworth, 2004）、日本では自己卑下的帰属を行う傾向が強く、自己評価が低く見積もられる可能性があるため、過去の成績をどう認知しているか確認する判別項目は必要だと考えられる。日本における自己卑下傾向のような、文化圏の違いによる自己評価の違いは様々な研究で示されている（Markus & Kitayama, 1991；北山・高木・松本, 1995；鈴木・山岸, 2004 など）。

1-1 本研究の目的

本研究の目的は、小島（2011）の研究で行われた調査を賞

賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度はそのまま使用し、防衛的悲観主義を測定する尺度を過去の経験に関する判別項目が複数含まれている防衛的悲観主義尺度（JDPI）に変更して再検討することである。これにより、小島（2011）で示された防衛的悲観主義と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連についての結果の信頼性を確かめるとともに、JDPI 尺度の妥当性についても確かめる。

2. 方法

2-1 調査時期と対象者

2020 年 10 月、11 月に高知工科大学において「マイクロ経済学入門」「マクロ経済学 I」の講義を受講している大学生に対し、講義時間の一部を利用してアンケート調査への協力を依頼した。調査には Google フォームを用いた。

2-2 尺度構成

1. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原, 2003）

賞賛獲得欲求および拒否回避欲求尺度とは、他者から受ける評価に対する欲求（承認欲求）を測定する尺度であり、各欲求 9 項目ずつ、全 18 項目から構成されている。「1. あてはまらない」～「5. あてはまる」の 5 件法で回答を求めた。

2. 防衛的悲観主義尺度（Japanese Defensive Pessimism Inventory：以下、JDPI とする。荒木, 2005）

防衛的悲観主義尺度とは、防衛的悲観主義を測定する尺度であり、将来の経験への認知的方略を問う 20 項目（悲観 12 項目、成功熟考 5 項目、努力 3 項目からなる）と、過去の成績への認知について問う判別項目 4 項目の計 24 項目から構成されている。「1. あてはまらない」～「6. あてはまる」の 6 件法で回答を求めた。なお、将来の経験への認知的方略を問う 20 項目の合計得点が高いほど将来の出来事に対して防衛的悲観主義を用いる傾向が強いことを示している。また、判別項目も、得点が高いほど過去を悲観的に捉える傾向が強いことを示す。

尺度の回答後、最後に所属、学年、性別、年齢について回答させた。ただし、1 回目の調査時は記述式で回答させたが、答え方に個人差があったため、2 回目の調査時は選択肢を設けて回答させた。

3. 結果

250 人の回答のうち、分析に必要な質問項目の欠損のなかったデータは 246 人分であった（有効回答率 98.4%。男性 148 人、女性 97 人、その他 1 人。高知工科大学経済・マネジメント学群 226 人、環境理工学群 7 人、情報学群 5 人、システム工学群 8 人。年齢 18 ～ 23 歳）。以下の分析ではこの 246 人のデータを用いた。また、すべてのデータは HAD を用いて統計分析を行った（清水，2016）。

3-1 因子分析

賞賛獲得・拒否回避欲求尺度と防衛的悲観主義尺度（JDPI）が先行研究と同様の因子に分かれるか、それぞれについて因子分析（最尤法，プロマックス回転）を行ったところ、表 1、2 に示したようにどちらの尺度も想定通りの因子に分かれた。以下の分析では、これらの因子の合計得点を用いた。

3-2 単純相関

賞賛獲得欲求得点（以下、賞賛獲得と表す）、拒否回避欲求

項目	Factor1	Factor2	共通性
1. 拒否回避欲求			
意見を言うとき、みんなに反対されないか気になる	.838	-.095	.679
自分の意見が少しでも批判されるとうらたえてしまう	.798	-.025	.629
優れた人々の中にいると、自分だけが孤立していないか気になる	.765	-.057	.570
場違いなことをして笑われないよう、いつも気を配る	.749	.022	.567
目立つ行動をとるとき、周囲から変な目で見られないか気になる	.740	-.091	.529
不愉快な表情をされると、あわてて相手の機嫌をとる方だ	.685	.150	.534
人から敵視されないよう、人間関係には気を付けている	.651	.087	.454
相手との関係がまずくなりそうな議論はできるだけ避けたい	.611	.037	.384
人に文句を言うときも、相手の反感を買わないように注意する	.519	.110	.305
2. 賞賛獲得欲求			
人と話すときはできるだけ自分の存在をアピールしたい	-.126	.858	.709
高い信頼を得るため、自分の能力は積極的にアピールしたい	-.006	.779	.605
大勢の人が集まる場では、自分を目立たせようとはりきる方だ	-.132	.748	.537
初対面の人にはまず自分の魅力を印象づけようとする	.034	.706	.509
自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる	-.029	.681	.457
皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある	.080	.593	.378
人と仕事をするとき、自分の良い点を知ってもらおうように張り切る	.120	.588	.388
責任ある立場につくのは、皆に自分を印象づけるチャンスだ	.101	.500	.280
目上の人から一目おかれるため、チャンスは有効に使いたい	.238	.385	.242

項目	Factor1	Factor2	Factor3	Factor4	共通性
1. 悲観					
この試験で自分の目標を達成できないかもしれないのではないかと心配になる	.797	.070	-.088	-.040	.645
大丈夫だと分かっているのに、最悪の結果を想像してしまう	.795	.008	.006	-.084	.653
この試験のときに何かよくないことが起こりそうで心配になる	.791	-.029	.160	.045	.643
試験に失敗したら一体どうなってしまうだろうかとよく考える	.786	.101	-.055	-.039	.629
試験の成績が悪かったらどんなに落ち込むだろうかとよく想像する	.766	-.089	.177	.059	.612
試験はうまくいかない気がする	.670	.030	-.259	.143	.529
この試験に失敗したら今後の進路にどのくらい影響するのか、よく考える	.657	.034	-.019	-.052	.442
試験がもうすぐだと思うと、緊張して体がこわばる	.637	-.064	.011	-.015	.414
試験問題に目を通したとき、まったく分からない問題がたくさんあって茫然としている自分の様子が心に浮かぶ	.617	-.154	.143	.187	.427
私がこの試験で良い結果を残すのは難しいだろう	.512	.026	-.310	.158	.387
試験の当日に起こりうるトラブルについて想像し、あれこれ考える	.509	.044	-.012	-.049	.268
試験に失敗したときのことはよく考えない	-.354	.199	.133	.177	.211
2. 過去の成績					
今までは、このような試験では良い結果だったことが多い	.002	.877	.047	.055	.773
これまでの試験では、たいがい優れた成績をおさめてきた	-.044	.835	-.033	-.044	.706
私は重要な試験では失敗したことがない	-.037	.710	-.031	.078	.462
この試験と似たような状況で成功したことがある	.011	.461	-.003	-.104	.254
3. 成功熟考					
試験がうまくいく様子を想像し、あれこれ考える	-.151	.073	.740	.143	.561
この試験で大きな成功をおさめる可能性がどのくらいあるか、よく考える	.145	.015	.647	.009	.444
試験で良い成績をとることができたらどんな気持ちになるだろうかとよく想像する	.208	.032	.628	-.105	.520
試験に成功したときのことはあまり想像しない	.117	.177	-.292	.024	.090
何のトラブルもなく試験会場にたどり着けた自分の様子が心に浮かぶ	-.111	.124	.187	.043	.075
4. 努力					
かなり前から十分時間をかけて試験の対策を練る	.082	.132	-.059	-.669	.510
試験のために一生懸命努力するのは好きではない	.193	.144	.077	.649	.371
失敗したときのことを考えると、自分はそうならないように入念に準備する	.177	.065	.169	-.564	.501

得点（以下、拒否回避と表す）、JDPI の判別項目（以下、判別と表す）、JDPI の将来の出来事に対する認知的方略を問う 20 項目（以下、JDPI-20 と表す）の 4 変数について、先行研究と同様、単純相関を算出した。JDPI は因子分析の結果 4 因子に分かれたが、以下では先行研究にしたがって、判別項目となる過去の成績因子のほかの 3 因子をあわせて JDPI-20 とし、全般的な防衛的悲観主義傾向として分析する。

表 3 に示したように、賞賛獲得と拒否回避との間 ($r(244) = .210, p = .001$)、賞賛獲得と JDPI-20 との間 ($r(244) = .229, p < .001$)、拒否回避と JDPI-20 との間 ($r(244) = .358, p < .001$) にそれぞれ中程度の正の相関が得られた。賞賛獲得と JDPI-20 においてみられた相関は、賞賛獲得と拒否回避との間に相関が存在するために見られた可能性があると考えられたため、賞賛獲得、拒否回避、JDPI-20 について、拒否回避と賞賛獲得をそれぞれ統制変数として偏相関分析を行った。その結果、賞賛獲得と JDPI-20 の間 ($r(243) = .168, p = .008$)（表 4）、拒否回避と JDPI-20 の間 ($r(243) = .325, p < .001$)（表 5）に有意な正の相関が見られた。また、賞賛獲得と判別の間には相関は見られなかった ($r(244) = .122, p = .056$)（表 3）。

	拒否回避	JDPI-20	判別	平均	SD
賞賛獲得	.210**	.229**	.122 +	26.350	7.720
拒否回避		.358**	-.100	33.028	8.306
JDPI-20			.034	71.386	13.995
判別				13.411	4.520

	賞賛獲得	JDPI-20
賞賛獲得	1.000	
JDPI-20	.168**	1.000

	拒否回避	JDPI-20
拒否回避	1.000	
JDPI-20	.325**	1.000

※表 3～表 5 はすべて ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-3 承認欲求による防衛的悲観主義の違い

賞賛獲得と拒否回避を平均で高低に 2 分割し、他者からの評価に対する欲求によって分析対象者を、両欲求が低い群（両欲求低軍 : 58 人、23.6%）、賞賛獲得欲求のみが高い群（賞賛高群 : 62 人、25.2%）、拒否回避欲求のみ高い群（拒

否高群 : 66 人、26.8%）、両欲求が高い群（両欲求高群 : 60 人、24.4%）の 4 類型に分けた。この 4 群間で、判別と JDPI-20 の得点違いがあるかについて一元配置分散分析を用いて検討した。

その結果、判別については得点に違いがあることは示されなかった ($F(3, 242) = 1.232, p = .299$)（図 1）。JDPI-20 については承認欲求の類型間において得点に違いがあることが示された ($F(3, 242) = 12.207, p < .001$)（図 2）。多重比較（Holm 法）の結果、両欲求低群 ($M = 64.086, SD = 13.906$) および賞賛高群 ($M = 68.258, SD = 13.924$) の 2 群が、拒否高群 ($M = 74.848, SD = 14.454$) および両欲求高群 ($M = 77.867, SD = 12.942$) の 2 群よりも 5%水準で低くなった（図 2）。

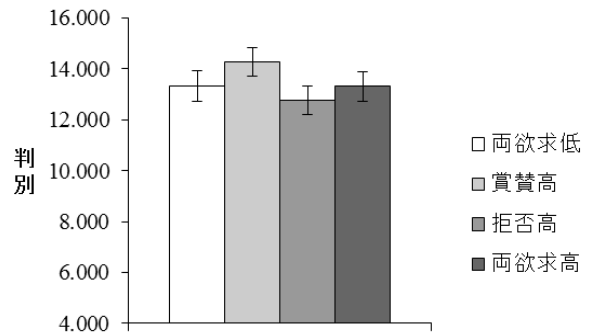


図1 承認欲求の4類型別のJDPI判別項目の平均値・SD

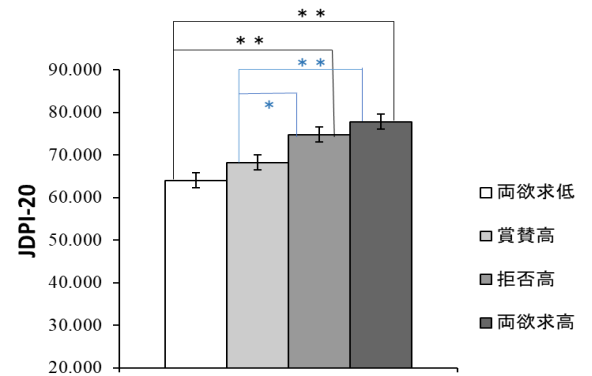


図2 承認欲求の4類型別のJDPI-20の平均値・SD

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

3-4 承認欲求と防衛的悲観主義の男女差

承認欲求と防衛的悲観主義の男女差について、2 要因分散分析を用いて検討した。その結果、承認欲求と性別においては、性別の主効果 ($F(1, 243) = 0.13, p = .717$) は有意ではなかったが（図 3）、承認欲求の主効果 ($F(1, 243) = 112.35$,

$p < .001$) は有意であった (図 4)。また、承認欲求と性別の交互作用 ($F(1, 243) = 4.63, p = .032$) も有意となった。下位検定の結果、賞賛獲得欲求における性別の単純主効果 (男性 : $M = 27.08, SD = 7.81$; 女性 : $M = 25.38, SD = 7.46$; $F(1, 486) = 2.65, p = .105$)、拒否回避欲求における性別の単純主効果 (男性 : $M = 32.58, SD = 8.43$; 女性 : $M = 33.68, SD = 8.16$; $F(1, 486) = 1.12, p = .290$) のどちらも有意ではなかった (図 5)。

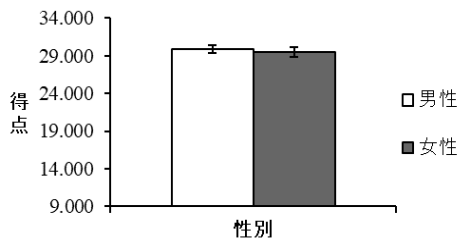


図3. 承認欲求と性別の2要因分散分析での性別の主効果

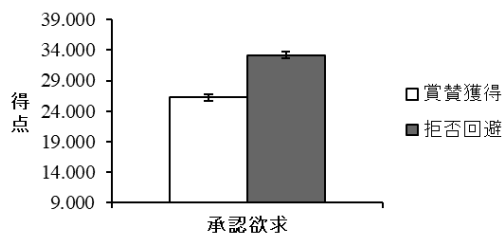


図4. 承認欲求と性別の2要因分散分析での承認欲求の主効果

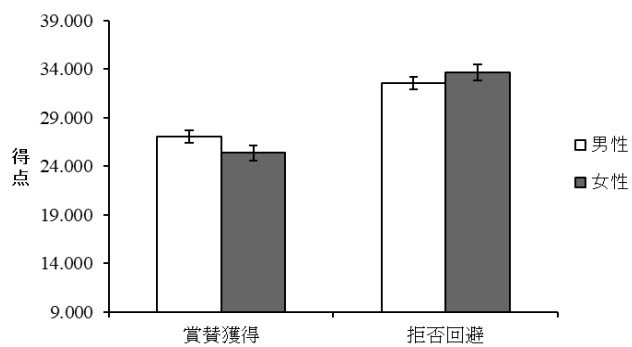


図5. 承認欲求と性別の2要因分散分析での承認欲求と性別の交互作用効果(下位検定)

防衛的悲観主義と性別においては、性別の主効果 ($F(1, 243) = 2.16, p = .143$) は有意ではなかったが (図 6)、防衛的悲観主義の主効果 ($F(1, 243) = 3367.51, p < .001$) は有意であった (図 7)。しかし、防衛的悲観主義と性別の交互作用 ($F(1, 243) = 1.93, p = .166$) は有意ではなかった。ここで

の防衛的悲観主義とは、JDPI-20 と判別項目の 2 水準の独立変数である。

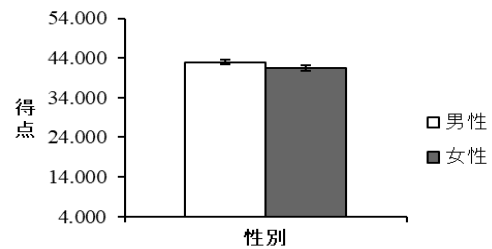


図6. 防衛的悲観主義と性別の2要因分散分析での性別の主効果

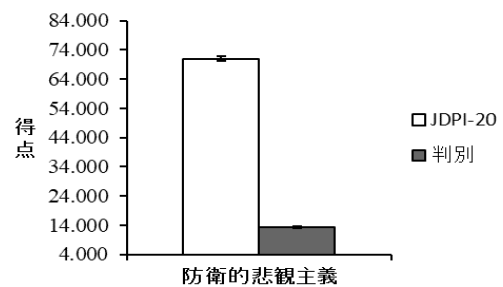


図7. 防衛的悲観主義と性別の2要因分散分析での防衛的悲観主義の主効果

3-5 JDPI 各因子と承認欲求の単純相関

これまでの分析では先行研究にしたがって、判別項目となる過去の成績因子のほかの 3 因子をあわせて JDPI-20 とし、全般的な防衛的悲観主義傾向としていたが、各因子についても承認欲求との単純相関を算出した。表 6 に示したように、賞賛獲得との間には、悲観において弱い正の相関 ($r(244) = .128, p = .045$)、成功熟考と努力において中程度の正の相関が見られた (成功熟考 : $r(244) = .219, p = .001$ 、努力 : $r(244) = .201, p = .002$)。また、拒否回避との間には、悲観と努力において中程度の正の相関が見られた (悲観 : $r(244) = .338, p < .001$ 、努力 : $r(244) = .183, p = .004$)。

	拒否回避	JDPI-20	悲観	成功熟考	努力	判別
賞賛獲得		.210**	.229**	.128*	.219**	.201**
拒否回避		.358**	.338**	.031	.183**	-.100

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

4. 考察と今後の課題

4-1 先行研究の再検討についての考察

小島 (2011) で行われた調査について再検討を行った結果を比較すると、本調査では、拒否回避欲求と防衛的悲観主義の関連性は同様に示されたが、賞賛獲得欲求と防衛的悲観主

義においては、先行研究とは異なった関連が示された。

単純相関については、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求、拒否回避欲求と JDPI-20 の間に、先行研究と同様の相関がみられ、結果の頑健性が示された。この結果より、他者から嫌われたくない欲求が強いほど将来の経験に対する悲観的予測が強くなる可能性が示唆される。賞賛獲得欲求と JDPI-20 との間に見られた正の相関は先行研究では見られておらず、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との間に相関が存在するために見られた可能性が考えられたため、賞賛獲得欲求、拒否回避欲求、JDPI-20 について、拒否回避欲求を統制変数として偏相関分析を行った。しかし、本調査では弱い相関が見られた。これにより、他者から嫌われたくない欲求とは独立に、他者から褒められたい欲求も将来の経験に対する悲観的予測を強める可能性が示された。また、賞賛獲得欲求と判別項目の間には相関が見られず、先行研究で得られた負の相関は再現されなかった。

承認欲求の 4 類型における防衛的悲観主義得点の違いについて、判別項目は違いが得られなかった。つまり、先行研究で得られた拒否回避欲求のみが強く賞賛獲得欲求が弱い人は、賞賛獲得欲求が強い 2 つの群の人と比べ、過去の類似経験をネガティブにとらえるという結果は再現性が低い可能性がある。JDPI-20 項目は、4 類型間で得点に違いが見られた。先行研究では、賞賛高群と他群の差については示されていなかったため、拒否回避欲求が強い人は（賞賛獲得欲求の強さに関わらず）、2 つの承認欲求がともに弱い人と比べ、将来の出来事に対して防衛的悲観主義の認知的方略を取ると結論づけていたが、本調査からは、両欲求低群のみではなく、賞賛高群においても他 2 群との差が見られた。つまり、拒否回避欲求が強い人は拒否回避欲求が弱い人と比べて将来の出来事に対して防衛的悲観主義の認知的方略を取ることが示され、賞賛獲得欲求の強さは関連していない可能性が示唆された。拒否回避欲求が賞賛獲得欲求とは独立に効果を持つという点では、先行研究と比べてより解釈しやすい結果が得られたと言える。この承認欲求の 4 類型における防衛的悲観主義得点の違いについての結果からは、JDPI-20 と賞賛獲得欲求の関連性が示されなかった。これは、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の得点を平均して高低で 2 分割した値を用いたために、相関分析では見られた弱い相関が見られなくなったと考えられる。また、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の平均の高低によって 4 類型に

分割した上で防衛的悲観主義の高低を比較したが、これは必ずしも賞賛獲得欲求と拒否回避欲求が原因で、防衛的悲観主義が結果であると想定しているわけではない。小島（2011）や、光浪（2010）など、これまでの先行研究においても、防衛的悲観主義とそれに関連する心理において因果関係は明確に示されていない。本調査においても、防衛的悲観主義と承認欲求について因果関係を特定するものではない。

4-2 防衛的悲観主義尺度（JDPI）の妥当性についての考察

荒木（2005）で作成された JDPI 尺度の妥当性について本調査の結果より考察すると、JDPI-20 と拒否回避欲求の関連において先行研究と同様、あるいはより明確な結果が得られていることから、妥当性が示されたと言える。判別項目と賞賛獲得欲求については先行研究と違う結果が得られたが、JDPI-20 と拒否回避欲求の関連で示された JDPI 尺度の妥当性と、先行研究で使われた J-DPQ 尺度は判別項目が 1 項目のみであり信頼性が低いということを考え合わせると、本調査のように、JDPI 尺度を用いた方が信頼性の高い結果が得られる可能性が示されたと言えるだろう。

4-3 承認欲求と防衛的悲観主義の男女差についての考察

承認欲求については、性別との交互作用は見られたが、単純主効果は賞賛獲得欲求、拒否回避欲求ともに有意ではなかった。承認欲求の男女差については様々な先行研究があるが、そのどれも男女差の程度にはばらつきがある。菅原（1986）では賞賛獲得欲求は男性の方が平均値が有意に高くなり、拒否回避欲求は女性の方が平均の方向としてはやや強くなるものの有意な差は得られていない。小島・太田・菅原（2003）では賞賛獲得欲求と拒否回避欲求のどちらも女性の方が平均値が高かった。本調査においては、男性と女性の間で承認欲求の持ち方に差がある傾向は示されたが、明確な違いは観測されなかった。

防衛的悲観主義については、本調査では男女差は見られなかった。先行研究においても、防衛的悲観主義の男女差については述べられていない（小島，2011；光浪，2010；外山，2005 など）。

4-4 JDPI 各因子と承認欲求の単純相関についての考察

賞賛獲得欲求と JDPI-20 の各因子において、3 因子すべてとの間に相関が見られた。拒否回避欲求と JDPI-20 の各因子においては、悲観と努力との間に相関が見られた。悲観因子と拒否回避欲求との正の相関は、JDPI-20 と拒否回避欲求の正の相関とほぼ同様の値となっており、JDPI-20 と拒否回避欲求の正の相関に強く影響していると考えられる。つまり、将来の経験について悲観的に考える人は、拒否回避欲求も高い可能性が示唆される。成功熟考因子は、賞賛獲得欲求との間にのみ正の相関が得られているため、将来の経験において成功したときのことを考える傾向のある人は賞賛獲得欲求も高い可能性が考えられる。努力因子は、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求共に正の相関が得られており、将来の経験に対して努力する要因としては、他者に褒められたい賞賛獲得欲求と、他者から嫌われたくない拒否回避欲求のどちらも考えられる。

4-5 今後の課題

本調査での先行研究の再検討において、防衛的悲観主義の将来の出来事に対する認知的方略と拒否回避欲求、賞賛獲得欲求の関連は示されたが、過去の経験に対する認知的方略が何と関連しているのかについては明らかにならなかったため、今後明らかにしていく必要がある。また、防衛的悲観主義とそれに関連する心理における因果関係について議論することで、防衛的悲観主義についての理解を更に深めることができるだろう。JDPI 尺度についても、本調査では妥当性があると判断したが、今後様々な研究で利用されることで更に妥当性は高まるだろう。

5. 謝辞

本論文を作成するにあたり、ご指導を頂いた三船恒裕准教授に心より感謝致します。また、日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂戴致しました皆様に深く感謝致します。

6. 参考文献

荒木友希子 (2005). 防衛的悲観主義尺度 (JDPI) の作成と信頼性、妥当性の検討について 日本パーソナリティ心理学会第 14 回大会発表論文集, 189-190.

Elliot, A. J., & McGregor, H. A. (2001). A 2×2 achievement goal framework. *Journal of Personality and Social Psychology*, *80*, 501-519.

Hosogoshi, H. and Kodama, M. (2005). Examination of defensive pessimism in Japanese college students: Reliability and validity of the Japanese version of the Defensive Pessimism Questionnaire. *Japanese Health Psychology*, *12*, 27-40.

北山 忍・高木浩人・松本寿弥 (1995) 成功と失敗の帰因: 日本的自己の文化心理学 心理学評論, *38*, 247-280.

小島弥生 (2011). 防衛的悲観性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連—2 つの承認欲求がともに強い人の特徴について— 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, *11*, 67-74.

小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, *11*, 86-98.

Markus, H. & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implication for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*, 224- 253.

光浪睦美 (2010). 達成動機と目標志向性が学習行動に及ぼす影響—認知的方略の違いに着目して— 教育心理学研究, *58*, 348-360.

Norem, J. K. (2001). Defensive pessimism, optimism, and pessimism. In E. C. Chang (Ed.) *Optimism and Pessimism: Implications for Theory, Research, and Practice*. Washington D. C. American Psychological Association Press, 77-100.

Norem, J. K., & Chang, E. C. (2002). -e positive psychology of negative thinking. *Journal of Clinical Psychology*, *58*, 99-1001.

Norem, J. K., & Illingworth, K. S. S. (2004). Mood and performance among defensive pessimists and strategic optimists. *Journal of Research in Personality*, *38*, 351-366.

清水裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案 *メディア・情報・コミュニケーション研究*, *1*, 59-73.

菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる 2 つの欲求について 心理学研究, *57*(3), 134-140.

鈴木直人・山岸俊男 (2004). 日本人の自己卑下と自己高揚
に関する実験研究 社会心理学研究, **20**, 17-25.

外山美樹 (2005). 認知的方略の違いがテスト対処方略と学
業成績の関係に及ぼす影響—防衛的悲観主義と方略的楽観
主義— 教育心理学研究, **53**, 220-229.